(財)三重こどもわかもの育成財団　機関誌
～親子で話そう　今日の出来事　一日一回！～

わかすぎ

第126号
2010
平成22年2月発行

ソーセージづくり

乳しぼり体験

子牛の餌やり

パン教室

3匹のミニブタ

INDEX

02　わかすぎ時評12
牛乳はミネラルウォーターよりも安いんです
05　インタビュー
三重の子どもたちを応援してくれるのは…
06　平成21年度青少年特別企画事業
中学生のメッセージ2010
作品募集
07　平成21年度青少年育成指導者のための研修会（報告）
平成21年度青少年育成功労者等表彰
08　平成21年度　家庭の日
「絵画・ポスター・標語展」
編集後記

〈編集発行〉
(財)三重こどもわかもの育成財団
〒515-0054　三重県松阪市立野町1291
中部台運動公園内
TEL：0598-22-4911
FAX：0598-23-7792
URL：http://www.mie-cc.or.jp

わかすぎ時評 12

牛乳はミネラルウォーターよりも安いんです。

―食文化の信頼性は、確かな農業から―

代表社長理事の木村修さん

20数年前、「美味しいバーベキューが食べられる」との一言に誘われて大学の先生や企業、役所の人達に紛れて初めて食べた焼肉は美味しかった。木村修さんの自信の程が判りました。その後、豚のテーマパーク『モクモク』に孫を連れて行くようになり、「温泉」の楽しみが加わり、パンやビール、ハム、野菜など新しい商品が誕生しています。今回は【食育】の話を伺う目的で、伊賀市の「農事組合法人伊賀の里モクモク手作りファーム」へお伺いしました。

URL http://www.moku-moku.com

■『農業』と『食育』は一体化で

木村：日本の農業を支援するには日本の食文化を見直して、日本の食を誇る若い人たちを育成することです。若者へ農業の魅力をどのようにして持たせるか、ってことが課題です。

Q 日本で作らなければいけないっていうのは、やはり信頼性ですか。

木村：一番大事なのは、地域で誰がどういう方式で作って、どのように作られているものかを知る安心感です。グローバル化で、どんどん食が変わっていった。そういう中で、何故日本の農業がこんなに支持されないんだろう、海外から来た物を毎日食べているけど、どうやって作られているかを知ることが無い。例えば牛の乳搾りをすることで、誰でも牛乳って牛の乳だとは知っていますが、牛がどれ位の餌を食べて、どんな牛がどうやって成育して、誰が牛乳を作るかっていうことを知らないで飲んでいるのね。

Q 乳牛っていうのは、子どもを産んで乳を出す牛のことですね。

木村：もちろん子どもを産んで、乳が出る。実際に乳搾り体験して皆が『温かい』て驚く。生きてる牛のおっぱいから搾っているのです。牛は草を食べて、４つの胃で草を分解して、そして自分の身体を作る。どうして草を食べてタンパクを生むのかっていうね。そして餌を食べて、ようやくこれだけの牛乳しか出来ないっていうことを知る。乳牛は永遠に乳牛だって思っていたと言う大学の先生もいるくらいです。体験を通して、牛の動きや匂いとかで実際に『命』て感じるのね。その瞬間、みんな感動して命を感じる。ここでの体験は情操教育的なことが行われているんです。

「牛乳はミネラルウォーターよりも安い値段で買える」って言うと、子ども達は「本当の価値って一体なんだろう」って気づく体験になります。餌やり体験とか、一日酪農体験とか、そういうのを経験することによって、家で飲む牛乳が牛の乳であることを知り、牛乳の価値をわかり、子どもたちは飲むと牛を思い出すでしょう。経験で判ることは、子どもたちには大切な学習なのね。

豚もそうですよ。と殺して首を除いた豚を一頭持ってきて解体する。豚を丸ごと見ますから、子どもには結構人気があります。骨を付いたのを用意してさばく。骨を抜いたりね。トンカツはどこで出来ていて、ばら肉ってどこか、ベーコンにはどこか、興味を持ってみますよ。そうすると豚の命をもらっているという事を知る。それが真の姿ですからね。そういうカリキュラムがあるんです。

Q 生々しい教育ですね。

木村：生々しいです。でも現実はそうですよね。何を知ってもらうかって言うと、毎日食べているものを感じてもらうんですね。命をいただいて生きることは全てそうですね。ニンジンもキャベツも。

大きくなって種を残そうとしているのを我々が途中で採って食べています。だから、生きることは他の命を奪って、自分たちはその恩恵を受けて生きている、と言う現実性ですね。そこで何を知って欲しいかというと、ものを捨てたり粗末にするなということ。

子どもたちは、これを知った時に初めて解る。何気なく当たり前のように捨てたりするけれど、どれだけの過程で、どれだけの手間隙を掛けて、物を作っているのかっていうことを、知ってもらうことです。“物を大事にしようよ”ってことをやっていくと、子どもたちには面白いのね。いろんな収穫体験、米作り塾とか、野菜作り塾とかいろんなカリキュラムに興味を持ち始める。牛に興味を持つと、牛をどんどん勉強し始めるしね。野菜に興味を持つ、花に興味を持つ、畑に行って虫が出てくると、虫に興味を持つ。子どもには面白いんだろうね、興味を持って質問してくる。

Q　質問を受ける方も、もっと勉強する。

木村：そう。面白いのは、子どもたちは興味を持つことで学習能力が付いて、いろんなことを勉強してきます。ネットで調べたり、実際それはどういう技術だとか、一回自分で作ってみたいとか、学習能力がつく。我々は子どもたちのそれぞれに好きな事が違うとか、個性があるっていう発見です。僕は職業教育って、個性を生かす学習能力だと考えるのね。子どもたちは自ら勉強し、自ら育っていくことが大事だと言いたいの。教育っていうのは上から教えていくっていうのも大事ですね。でも、自分から学んで育っていくっていう、それを『発育』っていうそうです。子どもが自発的に育っていく、学ぶきっかけを持つ現場での学習も大切ですね。僕たちはフランスから学んだのです。「いのち・ひとみ輝くフランスの教育ファーム」って、政府の作っているいろんな教育農場で1,500位の施設がある。

■ フランスでは、農家の人も教育者として指導法を学んでいる

Q　国内に、教育農場が1,500ですか。

木村：ほとんど農家です。農家で子どもたちが体験する。フランスでは制度化されて農家の人が「教育者」と任命されている。日本では制度化されていないから定着しません。

Q　“教育農場”の指導者って…

木村：麦農家は何を教える、ぶどう農家、酪農家は何を教えるかって、教育者として教育を受けてから教える立場になる。農家は受け入れ先として任命される。子どもたちが来たら、小学校から高校までそれぞれの段階によって、カリキュラムがある。どういうことかというと、地元の小学生が任命された地域の麦農家に来たら、毎日見ている麦畑の麦の種はこんなふうで、何日か経ったらこういうふうになって、収穫して出来た麦を脱穀して、粉にしてパンになったり、クレープになったりとか、実際に体験しながら説明を受けて学びます。幼児だったら、麦さわらせて、粉にしてパンを焼くとか、簡単なことを。中学になったらもう少し詳しいことを教えたり、収穫体験させたり。そういうことで対象年齢によってカリキュラムが違う。で、それぞれの子どもたちは麦っていうことをよく知る。毎日食べているパンは、おっちゃんとこの麦かな…って思ったりしたりね。地域っていうのはそういうものですよ。そうすると、地産地消型がどういうことか、制度化されているということは何か、考えるのね。農家へ50人生徒が来るでしょ、受け入れるでしょ、麦農家のおっちゃんは麦のことを教えます。そうすると、50人に対して、政府から一人200円とか300円お金がもらえる。教えることで日当がもらえる。バスのチャーター費は全部政府が教育機関にお金を出す、それが〈制度化〉ですね。

Q　おおぜい来てくれると良いですね。

木村：日本の場合は教育基本法が出来ても当事者に自分らでやってください。だから法律を作っても誰も踊

らないですよ。モクモクでこういうことをやるという最終ゴールのイメージは、教育ファームです。フランスの子どもたちは地域の農業を見て、地域の農業を知るきっかけが出来て、地域のものを食べる、地域のものを愛する。こんな麦がある、こんなに豊かで、やっぱりすごいな、わが田舎はすごいよね、っていう郷土愛に気付く。フランス人はそういう地方がほとんどで、うちのワインが良いとか、チーズが良いとか自慢になる。

Q 彼らの自画自賛のようですが、実際に地域色が育つって言うのでしょうか、個性的ですね。

木村：でしょ。だから地方文化がものすごく残る。

Q そういう風に、名も実もとっている。

■ スローフード…この地域の200軒の農家にも一緒に作ってもらっています

木村：そうすると、最終的にはフランス人はフランスのものを食べる。郷土のものを食べる。そうすると、自給率がものすごく上がります。みんなが誇って自分のところのものを食べる。イタリアで何故スローフードが生まれたかっていうと、ゆっくり長年かかって培ってきた食文化を大事にしようという意識です。ハンバーガーに対して反抗するわけですよ。もっとイタリアのものを大事にしようよと。自分たちの食文化を誇っている。最近、日本でＢ級グルメとかで「地場の」と言い始められたけれど、郷土のものを食べて地域の農業を支持するような日本の食文化はまだ少ないですね。

Q 最近は、農協さんが頑張って白菜やほうれん草等に人気があります。それに、「あそこのパン屋は最近パンの種類が増えたと思ったら、息子が手伝っているんだって」とか地域で会話ができるのは幸せですね。

木村：そうそう、そういうこと。ということは、知るきっかけ作りは、体験を通しての食育なんです。

Q 今回のお話は、青少年育成にかかわっている方やお母さんにも読んで欲しいですね。

木村：そうですよね。親子の体験も大事です。この間まではレンコン掘りを、レンコンってどういうふうに掘るって知らないですね。田んぼの中に入って、どろどろの中に下のほうにずっと茎が伸びている。みんなが苦労して、ハアハア言って、冷たい思いをして掘ってレンコンの価値をわかってくださる。これがレンコンだって。

　イチゴ狩り、これから始まりますけれども、始めから食べ放題ではなくて、ここでは30分間、まず勉強しないといけない。イチゴってどうやって出来るの？って、どんな植物かっていうことをね。イチゴって、花菜類（かさいるい）って、イチゴの種ってどこなの、イチゴの種があるから増えるのよ。で、ミツバチが受粉するんだよ、とね。「えッ、ミツバチが要るの？」って、みんな驚く。それから、採って食べる。

Q ミツバチがいないと、実にならないってことを学ぶ。

木村：そうです。今はそれを知らないですね。温室の中に入るとミツバチがいて、参加者はミツバチを見て、イチゴが受粉することを知る。こうやってこんなに時間をかけてイチゴが育つということを知る。それで、イチゴのおいしい見分け方を教えて、味をみてもらう。で、ゆっくりカゴ採りして帰っていただく。僕が一番ダメと思うのは「食べ放題、40分間1,800円」っていうふうにあちこちでやっていますけど、何か教育上良くないですね。どんな苦労でイチゴっていうものができていくかっていうことを知って初めてイチゴの価値がわかる。

Q まずは農家の人が自信をもたなきゃ。

木村：そうです。だからそういうことをやります。うちではゆっくり味を楽しんで食べてから、カゴ盛を作って持って帰るのです。親子で笑いながらゆっくり採ってもらう体験こそが、食育のスタートだと思うのね。そういうことを、20年間コツコツとやってきたんです。　　（文責：中西智子）

局長 太田 栄子さん

インタビュー

三重の子どもたちを応援してくれるのは…

平成20年４月、三重県健康福祉部に「こども局」が設置されました。子ども家庭室（健康福祉部）と青少年対策・青少年の健全育成（生活部）と家庭教育（教育委員会）がまとまって子どもを応援する組織です。太田栄子局長からお話を伺いました。

Q「こども局」ってどのような仕事ですか

太田：子どもや子育て家庭に関する取り組みを一元化するということで、それぞれの部署で行ってきた福祉的な取り組みと、青少年健全育成のように社会全般へ働きかける部門が一緒になりました。各部署で蓄積した技術知識・情報を総合的に活用しながら、子どもと保護者への施策を展開できるようになりました。

これまで蓄積されている様々な実例・事象やデータを社会の皆さんにわかりやすく発信することで、子どもたちのかかえる問題について、福祉的な活動や青少年健全育成活動の中でも理解を得ることができると考えています。地域の皆さんに適切なかかわりをしていただけるような関係を、地域で作っていきたいと思います。

◆「こども会議」と「たすきリレー」

こども局が今年度から始めた取り組みに「こども会議」があります。子どもの気持ちや、子どものやりたいことをもとに、子どもたち自身が企画した活動を地域の大人がバックアップする試みです。その中の一つですが、県内の児童養護施設に入所している子どもたちが、「たすきリレー」をしようという「こども会議」を行いました。子どもたちが北から順番に自分たちの思いを書いたオレンジのたすきをかけて、ある施設からある施設の子どもたちにつないで、それをバトンタッチした子どもたちが、また次にバトンタッチして…お城公園へ全員集合。そして、交流しました。子どもたちが企画して、少し職員さんに手伝ってもらい実現しました。

Q リレーっていうと、どこからスタートしてゴールはどこですか

太田：朝７時半頃に桑名を出発、12時頃に津のお城公園へ集合。そしてバーベキューです。全部は走破できませんので、途中からは電車かバスを利用しました。職員同士の交流もできて良かったです。

◆「みえ次世代育成応援ネットワーク」

太田：「みえ次世代育成応援ネットワーク」っていうのがありまして、現在700人位の会員です。地域の企業さん、子育て支援の団体・NPOさんとか、グループの方々にも入っていただいて子育て家庭を応援しています。地域に貢献したいという思いを持っていらっしゃる方々が「家族が元気にならないと、会社も元気にならないと、地域が元気にならないと、家族も元気になれない」ということでネットワークを作ったんです。みんなが、仲間になって、お互いに力を引き出しあって、面白いことやってみようよということで、４年目の「わくわくフェスタ」があります。かなりパワフルなフェスティバルで、毎年約２万人の子育て中の家族が来てくれます。また、企業さんやNPOさんがボランティアで参加するっていうのが、価値があるイベントだと思っています。

◆ 11月は「子ども虐待防止啓発月間」

太田：11月の虐待防止啓発月間の取り組みでは、三重県の「子どもを虐待から守る条例」に基づいて毎年実施しているのですが、ネットワークの皆さんに街頭啓発への参加をメールでお願いしたところ40人位来てくださって、一緒に啓発活動をしました。

Q 児童虐待って言うのは減らないですか

太田：減っていないですね。児童相談所が受け付けた児童虐待相談件数は全国的には増えています。三重県もずっと増えていたのが、去年相談件数が100件以上減って395件。本当に虐待が少なくなっていると良いのですが、通告が滞っていると危ない。深刻な問題は相変わらずです。市町の相談体制やNPOなどの相談活動が充実してきて地域で解決される事案も増えていると思われますが、児童相談所が受け付ける深刻なものは相変わらず減っていない。児童虐待の未然防止には地域の見守りや支援は勿論ですが、通告も大切ですので、こういう啓発をしっかりやろうと心を引き締めているわけです。

最後に

お話を伺い、「子どもや子育て家庭を見守り応援する活動が活発に行われている地域というのは、児童虐待などの問題を未然に防ぐ力のある地域である」と実感。地域や地域を越えて、より多くの人たちの連携・協働を進めることが必要といえるのではないでしょうか。

（文責：中西智子）

平成21年度　青少年特別企画事業

●「第２回　みえ青少年伝統芸能オンステージ」

県内で地域の文化の伝承に取り組んでいる人達を応援したいという主旨で行っている企画です。

開催日：平成21年11月１日（日）13：00～16：00

場　所：松阪コミュニティ文化センター

出演者は、迫間太鼓クラブ（志摩市）、明照児童館（伊勢市）、松ヶ崎かんこ踊り保存会（松阪市）、鳥羽市能楽保存会（鳥羽市）、中北條獅子連中（四日市市）、昴学園高等学校太鼓部（多気郡大台町）の６団体で、所属する小中学・高校生が技を披露してくれました。

次年度は、11月７日（日）に同会場で開催いたします。

▲ 松ヶ崎かんこ踊り保存会

▲ 中北條獅子連中

●「第２回 みえ青少年カプラ造形コンテスト」

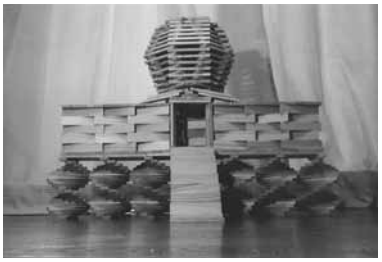
白木の板カプラで、課題「夢の家」の造形作品を募集したところ、中・高校生から17チーム（参加者102名）の応募がありました。

表彰式：平成21年11月22日（日）10：00～12：00

場　所：みえこどもの城　プレイルーム

・最優秀賞／タイトル「ドームの家」

チーム：KeiGo　代表　仲田啓悟さん（松阪市在住・中学生）



▲ 最優秀賞「ドームの家」

●「第２回　みえ青少年デジタルフォトコンテスト」

表彰式／平成22年２月７日（日）13：30～14：00

「友だち・なかま」をテーマにした人物写真を募集し、県内の中・高校生、大学生から45点の作品が集まりました。最優秀賞者は、仲の良い友達との楽しいひと時を撮影したものが選ばれました。応募してもらった全作品は２月28日（日）まで、みえこどもの城のミニ美術館等にて展示します。

・最優秀賞／タイトル「BEST FRIEND×BEST SHOT」

伊藤舞依さん（桑名市在住・大学生）

▲最優秀賞「BEST FRIEND×BEST SHOT」

・優 秀 賞／タイトル「夢を…」 瀬古口みづひさん（津市在住・高校生）

・優 秀 賞／タイトル「喜びのシグナル」 上村優依さん（鳥羽市在住・中学生）

＊上記の３事業は、平成22年度も継続して実施いたします。

中学生のメッセージ2010（第32回少年の主張三重県大会）作品募集

「中学生のメッセージ（少年の主張三重県大会）」は、中学生が日ごろ感じていることや考えていることを広く県民に訴えることにより、青少年が自分の生き方や社会との関わりを考え、また、青少年に対する県民の理解・関心を深めることを目的として実施します。昨年は県内63校から9,993人の応募があり、その中から14人の方々に大会で主張を発表していただきました。本年もたくさんの応募をいただきますようお願い致します。

◆**応募資格**　県内の国公私立中学校（特別支援学校中学部を含む）の生徒及び、それに相応する学籍又は年齢にある方。

◆**日　　時**　平成22年８月29日（日）13：00～16：10（予定）

◆**会　　場**　鈴鹿市文化会館　けやきホール　（鈴鹿市飯野寺家町810）

◆**提出期限**　平成22年６月11日（金）

※応募方法など詳細については当財団ホームページ（http://www.mie-cc.or.jp/ikuseihp/）を参照してください。

作品応募者全員に参加賞を贈呈します。また、当事業に対して協賛していただける企業・団体を募集しています。

「平成２１年度青少年育成指導者のための研修会」報告

平成21年12月17日（木）三重県総合文化センターにおいて、「平成21年度青少年育成指導者のための研修会」が開催されました。

県内各地から市町民会議関係者、青少年育成アドバイザー、県・市町行政関係者約90名の参加者が集い、基調講演と県内の青少年育成市町民会議及び関係団体による当財団の助成金事業「平成21年度地域活動支援事業」の実践事例発表を行ないました。

基調講演

■**テーマ**　今どきの　わかもの文化と家族関係
■**講　師**　三重県臨床心理士会副会長
フリースクール三重シューレ顧問
亀山市子ども総合支援室長　志村　浩二 氏

講演では、「ウチの中化現象」「若さ礼賛文化」や「子ども時代を子どもとして過ごすこと」の大切さなどを話されました。

事後アンケートでも「今どきの若者の実態について事例を交えた話はよく分かる」などの感想が寄せられています。

▲ 参加者の協力を得て、説明をする志村先生

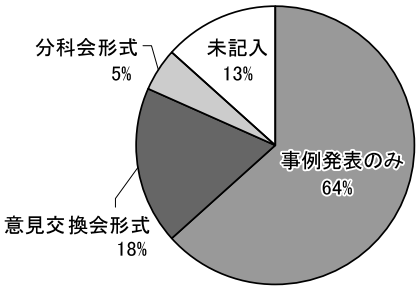
「地域活動支援事業」の実践事例発表

■東さくらが丘ふれあいまつり実行委員会（津市青少年育成市民会議経由）
事業名　東さくらが丘ふれあいまつり
テーマ　地域コミュニティの活性化 ～あいさつから始めよう～
発表者　東さくらが丘ふれあいまつり実行委員会代表
（津市青少年育成市民会議事務局長）大幡　貞夫 さん

■鳥羽市青少年育成市民会議
事業名　親子凧づくり教室＆新春凧あげ大会
テーマ　凧で結ぶ親子のふれあい、地域のきずな
発表者　鳥羽市青少年育成市民会議会長　宮濵　克行 さん

■紀宝町青少年育成町民会議
事業名　地域ふれあい合宿
テーマ　自然の中で子どもたちとふれあう
発表者　紀宝町青少年育成町民会議会長　門　賢 さん／事務局　野田　信 さん

事後アンケート
事例発表「形式について」の
質問に対する回答割合



この事例発表は、平成21年度中に県内各地16ヶ所で実践された各地域の活動の内３団体の活動紹介です。それぞれ特徴のある活動は、他の地域の方々にも今後の参考にしていただけたものと思っています。事後アンケートでは、「地域でこどもと大人が一つになって取り組むことは、地域とのつながりが深まっていくと感じた」「定期的に活動報告しあうのは良い事だと思います」などの意見が寄せられました。

平成21年度青少年育成功労者等表彰

平成21年11月６日（金）に三重県総合文化センターで開催された「三重県青少年健全育成関係者表彰式・研修会」において、長年、児童・青少年の健全育成にご尽力いただいている個人２名、団体１団体が表彰されました。

財団法人三重こどもわかもの育成財団理事長表彰（敬称略）
〈個人の部〉竹尾　美恵子（桑名市）　田中　要（桑名市）
〈団体の部〉子育ち広場∴ドロップ in（四日市市）

▲ 個人の部で表彰を受ける田中要さん

平成21年度　家庭の日
「絵画・ポスター・標語展」 各部門の最優秀賞

絵画・ポスター部門（松阪市青少年育成市民会議嬉野支部　推薦作品）

小学校低学年の部

タイトル「家族で楽しい海水浴」

賀川（かがわ） 鈴音（りのん）さん（松阪市・小学校２年）

小学校高学年の部

タイトル「家族で輪になって」

葛西（かっさい） 司（つかさ）さん（松阪市・小学校５年）

中学校の部

タイトル「新しい家族」

薬師寺（やくしじ） 春海（はるみ）さん（松阪市・中学校２年）

読書感想画部門（亀山市青少年育成市民会議　推薦作品）

幼稚園の部

タイトル「ことりのピチコ」

田端（たばた） 実和子（みわこ）さん（亀山市・幼稚園年中）

小学校の部

タイトル「鈴とリンのひみつのレシピ」

山野（やまの） 綾香（あやか）さん（亀山市・小学校3年）

標語部門（川越町青少年育成町民会議　推薦作品）

小学校の部

笑顔は、みんなを幸せにする最高のおくりもの

内藤（ないとう） 寿美恵（すみえ）さん（三重郡川越町・小学校６年）

中学校の部

「ただいま」と「おかえり」が聞こえる家

秋吉（あきよし） 美咲（みさき）さん（三重郡川越町・中学校３年）

編集後記

大阪府と大阪府教育委員会は「16歳のハローワーク」として、職業教育モデル事業を21年度から始めています。高校生の進路指導として、企業や専門学校が蓄積するノウハウを活用し、様々な分野での職業を心にめざす教育を進路指導進学や就職指導へ役立てる目的です。村上龍さんの「13歳のハローワーク」の高校生版です。大学生版も要るかな…。

『わかすぎ』編集長　中　西　智　子